



常識的 オーディオ術

◆寺島靖国

ケーブルは特殊に大事だ。

つい先日のことである。私はあるオーディオ・ファンのお宅で音を聴かせていただいていた。

気持ちのいい日曜日の午後で、マンションの7階の広い窓の外では晩秋には珍しくキラリとした太陽が輝いていた。

しかしこちらのお宅のオーディオの音はいっこうに輝いていない。それからあらぬかご主人の顔面も音と同じようにどんよりとしている。

この音ではこれ以上お邪魔していても仕方ないな。帰り仕度をはじめた時、一人の人がちょっとこれ付けてみましょうとケーブルを取り出した。

とんとん交換していったスピーカー・ケーブルをつ

なぎ終えた時、このお宅のオーディオに異変が起きた。

異変？ そうまさしく異変である。嬉しい異変。しかしこんな変わり方であるのか。

私はケーブルに凝り出してかれこれ10年以上追っている。その間にこれほどの激変をみたのは初めてと聞いていい。

耳が成長していなかったからあるいは見逃していたのかもしれない。一、二度体験したような気もするが、もうすでに記憶にはない。

とにかく音がバシーンと揃ったのだ。いきなり。ジャズのピアノ・トリオだったが、目の前に確かな全景が出現した。

スピーカーとスピーカーの間の空間が急に広がった感じだ。広がってバラバラになったのではなく、まとまってしっかりとした構図が描き出されている。

「チョー気持ちいい!!!」3人の男は心の中で絶叫した。うそではない。私は真実を述べている。間違いなく信じられない光景が目前に出現したのだ。

私は改めてケーブルの威力、いやその言葉では収まりがつかない。ケーブルの驚異に目を見張った。ミラクルだ。ケーブルにオーディオを託した私は間違っていない。

私はこれまで自分の体験からケーブルが重要と何度も言ってきた。しかしこの日、重要さを更新したのだ。

さて、話は変わってさるオーディオ・マニアから聞いた話。近頃、ますます、アンプやらスピーカー、そしてCDプレーヤーの音質が画一化されているというのである。もちろん前々からその傾向はあったが、現在どしどし顕著になってゆく。将来は測定器で計らねば各社の音質の差はわからなくなるのではないかというくらい。

オーディオ機器の無個性化が進んでいる。どれを買っても同じ。このことはオーディオのさらなる衰退とつながっているのだ。

オーディオ・ファンは買い換える毎に耳が成長してゆく。これまでとは別の音を聴きたくなる。それが、買い換えようにもどこもかしこも同じような音のスピーカーやアンプでは。

えーい、もう言うまい。腰のひけたメーカーにはなにを言っても無駄だ。とんとん各社同じ音のアンプやCDプレーヤーを作りなさい。そして衰弱しなさい。

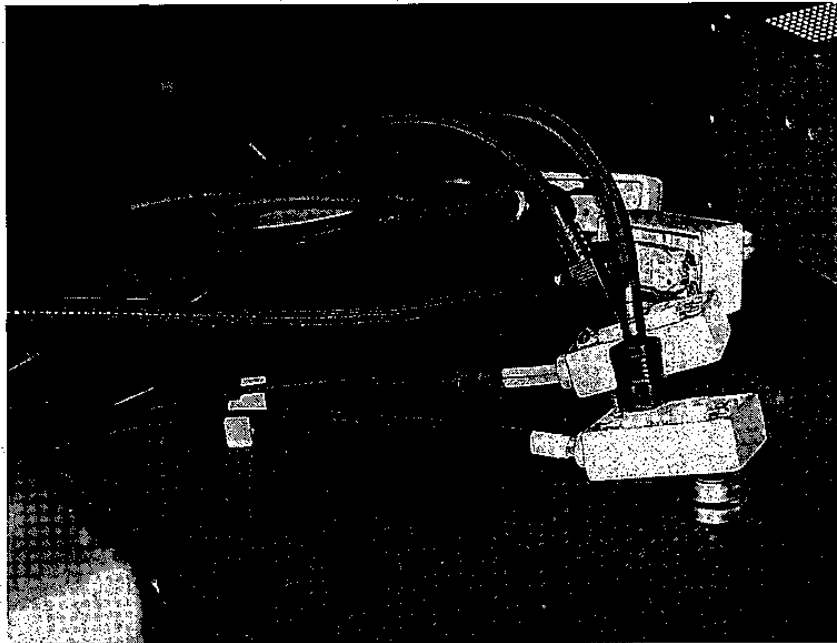
とは言うものの、オーディオを愛する私は、オーディオに残ってもらいたい。そこで提言。アンプやスピーカーはあきらめた。先ほどお話しした通り。

しかし、ケーブルだけはなんとかして欲しい。ケーブルは身軽である。未開である。10人のうち9人まではケーブルを信じていない。今こそケーブルの概念を作り変えるのだ。

ケーブルとはこういうものだ、という定義を作ってしまったらいい。

すなわちケーブルは音を変える機器である。武器である。

ケーブルによって音を変えるのだ。音を変化させるためにケ



一本一本、個性がウリだ

ーブルはある、ということファンに叩き込むのだ。

当然こうした発想はケーブル・メーカーにはまだない。だから他の機器同様どこも音は似たり寄ったり。大概、バランスを重視したものばかりだ。

しかし中には萌芽をみせるメーカーもないではない。私の体験した中で言うとジャズ・ファンの作るオルトフォンの「レッド・バロン」、元トロンボーン奏者が創設したヒロ・ミュージックの諸作品、元ドラマーが制作するTMDなどなど。これらがケーブルは個性的であるべきだという思想を持つメーカーだ。もっともっととんとん増えていてもらいたい。

オーディオの繁栄はケーブルから。そういう発想を強く打ち出していただきたい。

寺島靖国 (てらしまやすくに)

吉祥寺ジャズ喫茶「メグ」店主。超オーディオ・マニア。著書に「サニーサイド・ジャズ・カフェが選ぶビギナーのためのCDガイド」(朝日文庫)「新しいJAZZを聴け!」(宝島社)「JAZZ最初の愉しみ方 名曲名盤の聴きどころ」(三笠書房王様文庫)「JAZZとオーディオに魅せられた男のワンダーワールド〜まるごと一冊寺島靖国」(音楽之友社)、他、多数。最新刊「JAZZオーディオ寝ても覚めても四苦八苦」(河出書房新社)好評発売中。